坊刻本ハングル小説『辛未録』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000408

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

坊刻本ハングル小説『辛未録』について

鶴園　裕

【要旨】洪景来の乱とよばれる民衆反乱を主題にした坊刻本ハングル小説『辛未録』が、五〇年後の辛酉年（一八六一）に出版されたことを論じ、また日本の植民地時代に入ってからもあとずり本が出されていたらしいとの推論を行った。内容に関しては、記録性にすぐれていると同時に、口承伝承による部分も含まれていることを論じた。ことにそれは反乱の主導者である洪景来と禹君則の性格叙述において著しい。

はじめに

洪景来の乱とよばれる一九世紀初めの平安道地方の民衆反乱に興味をもって調べ始めて以来、一資料として出会った李朝末期のこのハングル小説が、民衆世界における記録と伝承の問題など、私に思わぬ視野を開いてくれた。本稿は、時代的にはやや先行するであろう当時の官辺の漢文資料や、後の民間の野史類などとの比較を行うことによって、記録と伝承のはざまに生れたハングル小説としての特異な性格の一端を伝えることができるなら、所期の目的を達したことになる。しかしその前提として、まずはこの坊刻本が生れ出た書誌の周辺をめぐることが必要であろう。

一、書誌の周辺をめぐって

私のもつ『辛未録』のテキストは、東京の静嘉堂文庫所蔵にかかるものの写真版である。原本の所蔵は、他に金東旭氏、韓国の国立中央図書館、韓国精神文化研究院などが知られている。そのうち金東旭氏の所蔵本は、『古小説板刻本全集』の第二冊に影印収録されており、静嘉堂蔵本とのテキスト原文の比較が可能である。その結果、両本は同じく三二張本で、テキスト二〇張末行と二一張初行の同一文の重複や、刊記の特徴などから、静嘉堂文庫蔵本と金東旭氏蔵本は、同一刊本であることが判明した。とりあえず『古小説板刻本全集』からその書誌部分をひかせて頂く。

신미녹

木板本（京板）〔一八六一年刊〕（金東旭所蔵）一冊（三二張）二五・五×二〇㎝　四週単辺
半葉匡郭　二一×十六・五㎝　無罫一二行、一八～二三字　板心上花紋魚尾　坊名、紅樹洞(1)

静嘉堂文庫蔵本は、判型が筆者の実測で二三・五×一八・五㎝とやや小型であるが、半葉匡郭などの大きさやその他の特徴はまったく一致しており、同一刊本であることは疑いをいれない。なお静嘉堂文庫の『国書分類目録』には「辛未録（朝鮮諺文）二巻　朝鮮刊」(2)としており原本も『辛未録単』『辛未録復』と表紙に墨書した二冊のテキストが存在するが、後者は、内容から『張風雲伝』(補註)二七張本、戊午紅樹洞新刊の別本であり、目録は誤りである。いずれも外題と刊記以外はすべてハングルで書かれており、表紙の外題は後に墨書したものと思われる。

内題は「신미녹　권지단」（辛未録　巻之単）で始められているが、巻末は「임신녹　종」（壬申録　終）でおえている。ちなみにこの民衆反乱は、朝鮮純祖の辛未年（一八一一）の年末に始まり、翌年の壬申年半ば（陰四月一九日）に終結したのであるが、内題と巻末の結句の不一致は、記録者としての意識のあり様を示すものであろう。

坊刻本というよび名は、政府・官人による刊行物ではなく、市井の坊間の人によって「読者の需要に応ずるため市

場で出板せられたもの」という前間恭作や金東旭氏の呼称に従った。[3] 旧時には이야기책（はなし本）や諺書小説などとよばれたのであろうが、ここではジャンルとしてのハングル小説という呼称を使う。[4]

一般に坊刻本には刊記を欠くものも多いが、『辛未録』には「辛酉二月日紅樹洞新板」の刊記が記されている。辛酉（年）に関しては、事件発生後五〇年を経た辛酉年（一八六一）であろうと当然の如く金東旭氏の解題を信じて疑わなかった。しかし韓国精神文化研究院の『韓国古小説目録』（一九八三）を見るに及んで、にわかに疑問が生じた。目録四七頁、目録番号六一一～六一四番にかけて四冊の『신미녹』（『辛未録』）が登録されているのであるが、そこでは例えば六一四番に次のような書誌が掲げられている。

신미녹

木板本（国文）、京城、翰南書林。大正一〇（一九二一）。一冊。四周単辺，上二葉花紋魚尾。二五・八×二〇・四cm　別名：홍경내전。刊記：辛酉（一九二一）二月日紅樹洞新板。印：懐月蔵書。原本所蔵：韓国精神文化研究院。[5]

つまり、辛酉年をもう一巡後の一九二一年にあてており、他の三冊の刊本も表記の仕方は多少異なるものの、いずれも京城翰南書林が版元の木板本となっている。金東旭蔵本や静嘉堂文庫蔵本には、そのような版元の表示はないので、辛酉年、一九二一年説は有力かと思えた。しかし私は以下の二つの理由から、静嘉堂文庫蔵本の辛酉年は、やはり一八六一年であると考える。

まず第一点は、静嘉堂文庫蔵本の来歴に関してである。静嘉堂文庫の『辛未録』には、宮島本の印がおされており、目録にはこの本が宮島某の蔵書であったことを明示している。宮島本に関しては、『静嘉堂文庫略史』に以下のような叙述がある。「同三二年（明治）宮島某の蔵書一五九一部を購う」。[6]

明治三二年は一八九九年であるから、宮島本はすでにそれ以前の蒐集にかかるものとなり、辛未年（一八一一）の事件以降、一八九九年までの辛酉年は一八六一年の一度のみである。

第二点は、傍証とでもいうべきものであるが、モーリス・クーランの《BIBLIOGRAPHIE CORÉENNE》の目録番号八一八番に『辛未録』が登録されていることである。[7] 周知のようにクーランの書誌の第一巻は一八九四年の刊行であり、またその目録にも辛酉年は明瞭に一八六一年と表示されている。以上の二つの理由から、辛酉一八六一年の刊本は明らかに存在し、静嘉堂文庫蔵本は、まちがいなく一八六一年の辛酉にかかる刊本であると思われる。

紅樹洞に関しては、越智唯七の『新旧対照朝鮮全道府郡面里洞名称一覧』（一九一七）によると、京城府昌信洞の旧地名の一部に出ており、[8] 既にそれ以前に改称せられたものと思われる。また『서울通史』上（一九七二）には、「別篇ソウルの行政区域変遷」の項に甲午更張時（一八九四）に改正された名称として、崇信坊（城外）の東大門外契中に紅樹洞の名がみえる。[9] 以上の考察から、紅樹洞は現在のソウル東大門区の東大門城外、昌信洞附近であろうと思われる。金東旭氏の論文「坊刻本에 대하여」（一九七〇）にはソウル坊刻本板刻地の図が掲げられており、[10] この図をみても東大門外の現在の昌信洞にまちがいない。ちなみに同論文その他から、紅樹洞の刊記をもつ坊刻本のいくつかをあげておく。中国小説・朝鮮小説をとわず、多くの小説類を刊行している点が注目される。

① 『唐太宗伝』戊午二六張本（一八五八）
② 『三国誌下』咸豊己未二九張本（一八五九）
③ 『月峯記』上二四張、下二三張本
④ 『淑英娘子伝』咸豊庚申二八張本（一八六〇）
⑤ 『梁豊雲伝』咸豊戊午二九張本（一八五八）
⑥ 『張豊雲伝』戊午二九張本
⑦ 『張豊雲伝』戊午二七張本
⑧ 『諸(斉)馬武伝』重刊三二張本

⑨『趙雄伝』三〇張本、重刊本もあり。

⑩『張韓節孝記』二九張本

なお、刊記の紅樹洞の樹の字には樹に作るものと樹に作るものの二種がある（静嘉堂文庫蔵本『辛未録』は前者）。これらを並べて気付くことは、一八五〇年代の末から『辛未録』がだされた一八六〇年代の初めにかけて、紅樹洞における三〇張本前後のハングル小説の坊刻が一種のピークを迎えていたらしいということであろう。初め、私は『辛未録』の刊記にある新板の意味を「新しく板にしたもの」という意味にとらえ、旧板の存在を想定して研究発表の際のレジュメにもそのように書いたが（『朝鮮学報』一一〇、彙報参照）、これらのハングル小説をながめてみると（②、④、⑤、⑥、⑦、⑨、⑩の小説は新板の刊記をもつ）、これは単純に新刊本の意味に考えた方がよいようである。むしろ旧板が存在するのに新しく板をおこしたような場合には重刊などと記したのであろう。

平安道地方の地方的な民衆反乱がどのような形でソウルにまで伝えられ、五〇年後の東大門城外の紅樹洞で坊刻の木板ハングル小説に仕立てられたのかという点は興味のつきない所であるが、現在となってはよくわからない。もっとも辛未年当時の平安道地方における民衆反乱は、うわさとなってソウルにまでも大きな反響を及ぼし[11]、地方の郷軍だけでは反乱の鎮圧にてまどってソウルの京軍（中央軍）も数百人の規模で出陣したほどであるから、そのような民衆的記憶が言い伝えられたことは考えられる。

また反乱の当初から、この反乱の鎮圧に参加した地方官や地方の政府側義兵などの記録が、『関西平乱録』（二〇冊）や『陣中日記』『西征日記』などの大部の官側の漢文記録として残されており、一応『辛未録』を考える際にもこれらのことは前提にしておかなければならないであろう。同時に漢文による野史類なども、『辛未録』を前後する時期には成立していたと考えなければならない。もっとも、これらの漢文記録類は、写本の形で伝えられており、坊刻本のような多くの読者を想定することはできない。

この章の最後に、韓国精神文化院蔵本について、私なりの考えをのべておく必要があろう。私はその原本を実地に見ていないので、正確なことは言えないが、多分に目録所載の翰南書林本は、日本の植民地時代のあとずり本ではなかろうかと思われる。金東旭氏の『古小説板刻本全集』には、同じく仁寺洞翰南書林のあと付を付したあとずり本と思われる『三国誌』[12]や、『張韓節孝記』[13]などが収録されており、植民地時代に入ってもこれらの小説類があとずりされて売られていたことはまちがいない。翰南書林は版元というよりはむしろ板木を所有した総販売元と考えた方がよいのかも知れない。ちなみに翰南書林刊となっているものには、『千字文』（一九一六）や『擊蒙要訣』（一九二二）などの初等教科書類から、『四礼摂要』（一九一八）『喪祭礼抄』（一九一七）などの、漢文による礼書類、『全韻玉篇』（一九一七）や『奎章全韻』（一九一七）などの韻書類など、手広くあつかっている。[14]このことは、『辛未録』のあとずり本が、たまたま六〇年後の大正年間にも販売されており、大正年間の辛酉年（一九二一）にかけられたものであろう。『辛未録』の民衆世界における根強い人気を物語るものといえるかも知れない。

一九二〇年代といえば、すでに三・一独立運動をへた後の留学帰りの若い人々を中心に、新しい文芸雑誌が創刊されつつあった時代であるが、[15]一方では、このような新風潮とは無縁に、『辛未録』に代表されるような民衆世界が、国文学の研究対象としてではなく、生きた世界として読み語られていたであろうことは、興味深いことである。いまや一歩を進めて『辛未録』の小説世界そのものの中にわけ入るべきであろう。

二、漢文記録と口承伝承の間

『辛未録』の冒頭は、

대청가경황제즉위십뉵년은즉아조셩상십이년이라（大清嘉慶皇帝即位十六年은即我祖聖上十二年이라）

という書き出しで始まっている。文章はすべてわかち書きなしのハングルによって書かれているものの、カッコ内の

漢文ハングル混交文のおきかえで示したように、かなり漢文的な調子の強いものである。

清の嘉慶一六年は朝鮮の純祖一一年であって、一二年ではない。はじめ「십일년」とすべき所を「일」字の「ㄹ」받침の脱落、誤記かと考えたが、他にそのような個所がない。しかし、この反乱がおきたのは、純祖一一年一二月一八日（陰暦）の年末であった点、しかもこの小説の末尾は「壬申録」で終っている点などから、壬申年（純祖一二年）との錯覚が伝聞者、或いは板刻者にあったものかも知れない。

漢文記録類では、例えば野史的な『辛未西賊日記』[16]（京都・河合文庫）などでも冒頭に「大清嘉慶十六年即上之十一年也」と紀年をまちがえるようなことはなく、正確に叙述されている。いずれにしても小説の冒頭から『辛未録』が漢文記録類からの直接の転写ではなく、口承伝承をハングルという文字に写した可能性を示しているように思われる。

物語りは、累年のように凶作が続く平安道清北（清川江以北の意）の多福洞に龍岡の洪景来、嘉山の李禧著、郭山の禹君則が連日のように大事を謀議する場面から始まる。ここで洪景来、李禧著の出身地は他の漢文資料と一致する。しかし問題は禹君則である。彼に関しては、おおむね『西征日記』や『陣中日記』などの漢文資料が嘉山の出身としており、禹君則（一名禹龍文）自身の供招（供述書）では、

本以泰川県新城里居生之人、去戊午年分、移接嘉山東北面清渓里[17]

としており、泰川居生で戊午年（一七九八）すなわち蜂起十数年前に嘉山に移居していることがわかる。このことも或いは伝承と漢文記録類との情報源の違いを示すものかも知れない。この小説では禹君則がかなり中心的な人物として描かれているので、この点は注目に価いする。

叙述上の特色は、

황여우민이셩명ᄒᆞ신덕ᄐᆡᆨ을아지못ᄒᆞ고외람이텬지를거ᄉᆞ리니[18]（況여愚民이聖明하신德沢을아지못하고猥濫이天地를逆らうので거스리니）

などという叙述が示すように、儒教的な観点からの批評を加えながらも、かなりの程度に空想をおさえた事実叙述、歴史的叙述に近い立場に立っている。例えば農民軍の服装に関しては、

군복을마련할시머리의호피를마락이모양갓치민들어홍션젼으로우흘두루고청화포로각〃등거리흘벌식흐여입히니그모양이호병ᄌᆞ더라[19]（軍服을磨練할새머리의虎皮를마락이模様같이맨들어紅線纏으로우흘두루고清華布로各各등거리한벌식하여입히니그模様이胡兵같더라）

とあるように、具体的である。農民軍の服装が胡兵（中国、清兵）のようであったとの叙述は漢文資料類にもみられるが、このように具体的に材質までもあげて叙述したものは、むしろこの後に『辛未録』を一部したじきにしたと思われる『東国戦乱史』[20]（一九二七）などにあるだけである。

農民軍の募集は「心腹之人」をして銀店（銀山）の開発を名目に力士（力もち）を厚く待遇するとのふれこみで、嘉山、博川、亀城などから飢民、数百名を集めたとある。この叙述は、歴史事実とも照合する。[21] また主導者たちの農民軍内での役割についても、「禹君則がみずから謀士となり、号して曰く禹先生、洪景来をして大元帥にすえ、郭山金山士用を副元帥にすえ、進士の金昌始を謀士にすえ、洪総角を左先鋒、介川の李済初は後軍長」[22]と具体的でかつ漢文資料類などの記述とも一致している。

禹君則の軍装に関しては、「軍巾をまき、鶴装衣をきて白羽扇をもち」景来は「白金の兜具に紅金の甲をつけ、長槍をもち手旗には平西大元帥司命」と書いたとのべている。[23] これらはどこまでが事実か確認のしようがないが、洪景来が平西大元帥をなのったという事実は疑いようがない所から、このような旗をもったということもむしろ事実であろう。[24] このように記述の細部にわけ入れば、おもしろい事実と思われることが様々に発見されるのであるが、小説の展開を追う必要がある。

金士用、李済初をして一技兵を率い、郭山博川、鉄山、宣川などをうたせ（北進軍）、洪景来自身は諸将を率いて

一技兵を駆り、嘉山をとる（南進軍）のであるが、その際の農民軍のセリフとして書かれていることには注目すべきものがある。

경뇌등이동헌의닐러되호왈군슈는쌀니항복호여의병을영접호라[25]（景来等が東軒に至って大呼曰、郡守は早く降伏して義兵を迎接せよ）

ここでは、はっきりと農民軍自身のセリフとして義兵をなのったことが読みとれる。この小説にはもう一カ所、「賊将曰、我々は天旨に従って義兵をおこしたので、残命を惜しむのであれば、速やかに降伏せよ」[26]とのべる場面があり、天旨に従った義兵という意識が示されている。このような意識は農民軍の激文にも義旗という単語でみえるが（註24参照）、おおむね官側の漢文資料類には無視されており、後に野史類などにわずかに農民軍側に寝がえった地方官などのセリフとしてみられる程度である。[27]このことから『辛未録』の作者は儒教的な世界観にたちながらも、かなり伝承を主体とした事実叙述の立場にたっていたのではないかと思われる。

嘉山郡守鄭蓍とその父の殺害場面は具体的である。またこの場面の直後に郡守の愛妓である官婢の雲娘が登場し、郡守の息子（史実は弟）を介抱するのであるが、それぞれは手短かなエピソードとして語られ、話は軽快なスピードで進められる。[28]場面の転換は、이날（この日）、이씨（この時）、などと自然に行われる場合と、각설（却説）によって明瞭に場面転換を示す場合とに分れる。三二張本一四〇〇字たらずのこの小説のなかで、六回の「却説」による場面転換が計られるが、時間の流れにそっているためにそれほど不自然な印象はうけない。

嘉山を落し博川に進んだ洪景来らは、博川郡守を捕縛し、降伏させようとするが、忠節の心あつい郡守は降伏しない。洪景来が富貴を共にしようと誘うが、断固拒否するので再び監禁するが通引の李基栄の手引きで脱出するという、エピソードが時間の継起に従ってつみ重ねられる。これらの話も漢文資料によって裏づけられる。[29]

前半のやま場である農民軍が博川津頭に陣をひき、松林をへて兵営のある清川江対岸の安州を攻撃しようとする場

面では、禹君則、洪景来の描かれ方が興味深い。以下引用が長文にわたるので、煩雑をさけるため漢字ハングル混交文に和訳を付したもののみで示す。

君則이(が)松林百姓을(をよんで命じて申すには)불러吩咐(おまえたちは)曰、너의등은各各해(たいまつ一つずつもって)나식가지고松林네곳의나아가(四カ所に出て)불을혀라(火をつけよというので)ᄒᆞᆫ디景来問曰、이는무삼(これは何の)計리닛가(ですか)君則曰、이는官軍을(これは)ᄒᆞ여금우리軍兵多少를(をして)헤아리지못ᄒᆞ게(われわれの)ᄒᆞᆷ이로소이다(をかぞえさせないためである)景来ㅋ神鬼ᄒᆞᆷ을(その)못ᄂᆡ歎服ᄒᆞ더(であることにさいごまで)라(していたそうだ[30])

農民軍が辛未年の十二月二四～二六日まで博川松林でたいまつをともし、軍勢の数を政府軍にわからぬようにさせようとしたことは、当時の平安兵使李海愚の状啓文にも記録されている。[31] 問題はこの叙述では禹君則が極めて知恵の働く人物として描かれているのに対して、洪景来はむしろ凡庸な人物として描かれている点である。

このような叙述は、この他にも二ヵ所ある。一ヵ所は農民軍が松林での戦いに敗れ、官軍の追兵を恐れながら、定州城に逃げこもうとする場面である。洪景来が追兵を恐れているのに対して、禹君則が元帥はどうして用兵を知らないのかとたしなめる場面がある。禹君則によれば、暁星嶺をこえてしまえば官軍は伏兵を恐れて動けないので、翌日行軍すればよいということであった。その言葉に洪景来は大喜して曰、勝敗は兵家の常であり先生の高い計巧は、鬼神もおしはかることができないとのべている。[32]

一二月三〇日、寅時平安兵使状啓には、「日已昏黒、不可深入、始為留住、待明朝欲為進戦」[33]とのべておりこの事実をうらづけている。また後に京軍の一員として参加した方禹鼎はその日記で「賊党、自松林、一昼夜駆民入定城、官軍、五日僅到城外、賊得従容備守、尤為失着、可痛」と批判し、その直後に割註で、「賊魁景来、敗到嘉山、賊徒皆惧追兵且至、景来対博而笑曰、渠安敢追我、已而果然、賊尤信服云」[34]との伝聞があったことを記している。

方禹鼎の『西征日記』は、この反乱の鎮圧作戦に参加しながら、かなり早い時期に作成されたものと思われ、もしこの割註が同じ時期に書き込れたものとするなら、すでにかなり早い時期から洪景来を英雄化する伝承が生れていた

ことを物語っている。にもかかわらず『辛未録』は洪景来を凡庸な人物として描いている点が特異な点である。『辛未録』はこのあと、定州における籠城した農民軍と、それを攻める政府軍、平安道出身の許沅、金見臣らを中心とした政府軍側義兵将との攻防戦が時間の流れに従って延々とくりひろげられるのであるが、ここでも洪景来の凡庸さ、禹君則の名将ぶりを示す叙述があらわれる。

二月二五日、籠城戦の長期化にともなって政府軍側は雲梯などの攻城具を使用して城を破ろうとするのであるが、洪景来はどうしてよいかわからず禹君則に相談した所、禹君則は元帥は心配なさるな、私が自ら防備しようと言い、部下に命じて火薬で攻城具をやきはらわせる。[35] この日の官軍の総攻撃は完全な失敗で『陣中日記』にも、

至于黄昏、鳴金而退、各陣戦車、亦皆自焼而帰、咸・義両軍、不退而連攻北将台、朔州陣追後来戦、皆無功、是役、東門中丸死者十九・傷者三十余、南門死者十三、傷者二十、北将台死者二十余、傷者三十余、西門死者四、傷者二十余、大陣士気益沮。[36]

とのべ、惨憺たる死傷者を出しながら、何らの功もなかったことをのべている。「大陣士気益沮」という所は、ハングル小説ではもっと露骨に「各陣이ᄌᆞᄌᆞᆫ敗ᄒᆞᆫᄆᆡᄃᆞ시ᄉᆞᆯᄒᆞᆯ마음이업더라」(がしばしばけるので再びたたかう気持がなかった)[37]と表現されている。この直後には巡撫中軍が朴基豊から柳孝源に更迭されるのであるが、『辛未録』ではただその事実が淡淡とのべられているのに対して『陣中日記』の二月二十七日の条などには『賊知大陣主将之交遞、登城大呼、詬辱無比』[38]と農民軍側の動きを伝えている。以上、漢文記録類と『辛未録』の間には、記録と伝承の問題をめぐって様々のおもしろい事実が散見されるのであるが、ひとまず洪景来と禹君則の描き方の特異さなどに注目しておいて、あらためてこの小説の意味づけをまとめの形で行ってみたい。

三、まとめ

この小説の末尾では、壬申四月一九日午時に火薬で城壁を爆破して政府軍が城に突入し、洪景来を斬って、洪総角、禹君則らを函車に乗せてソウルに送り、残余の盗賊中、一五才以上を殺したのが千余名に達したとのべている。これもほぼ漢文記録類の叙述と一致している。[39] このあと、「京師（ソウル）に凱旋した兵士を万城人民が喜び、上（国王）が功臣を功によって封爵し、将卒をねぎらい、戦亡した将卒の家族を賞賜し、八道に頒布して罪人を赦免し、これによって四方が大平となった壬申録　終」[40] とむすんでいる。伝統的な小説がおおむねそうであるように、この小説も通俗的なハッピーエンドの形式で終っている。

『辛未録』の基調は、儒教的観点から農民軍を賊軍とし、政府軍や官軍に参加した金見臣、許沆らの政府軍側義兵将を、どこまでも正義の側として描いたものであるが、その細部においては、漢文資料類とは異なった伝承を含むものであった。ことに農民軍内部の描き方、その中でも洪景来と禹君則の把握の仕方が特異であったことは第二章でのべた所である。

この小説を正面から論じたものは、管見の限り存在しない。わずかに金東旭氏が、『春香伝研究』所収の論文の中で、「洪景来乱の顚末を記録した記録類小説で、その裏面性を記録せず、官の立場から書いているが、その細々たる内幕が書かれており、一般民衆たちの民擾に対する関心をうかがうことができ、興味のある記録である。」[41] と『辛未録』を紹介されている。事実、その記録性は漢文記録類と較べても遜色はない。しかも農民軍の内幕に関しては、漢文記録類にはない、口承伝承に基いたものと思われるものも含まれており貴重である。小説としては想像力に欠ける点や、パンソリ系小説にみるようなことば遊び的要素などが欠如している点でおもしろみはないが、儒教主義的な事実重視の立場はうかがえる。

李朝がおわり、日本の植民地時代になると、王朝史的観点は消え、やがて当時の李朝政府の「裏面性」や洪景来を英雄化した小説類がかかれるのであるが、[42] この『辛未録』というハングル小説は、それ以前の王朝史的観点から描かれたものである点、しかもその小説が、日本の植民地時代になってからもあとずり本がだされていたらしい点など、様々の興味はつきない。しかし力およばずして、とりあえずはこのような小説の存在を紹介するにとどめて筆をおく。

註

(1) 金東旭編『景印古小説板刻本全集』(延世大学校出版部影印、一九七三) 第二冊、解説三頁。

(2) 静嘉堂文庫『国書分類目録』「文学・歴史の部」(一九一九) 八七五頁。

(3) 前間恭作『朝鮮の板本』(松浦書店、一九三七) 金東旭「坊刻本에대하여」(『東方学志』十一、一九七〇)

(4) ことにこの呼称は、大谷森繁「李朝小説の覚書(一)—主に読者に関する考察」(『朝鮮学報』四五、一九六七) で日本においても確定したものと思われるが、旧時における呼称及び中国小説の翻案との関連は、朝鮮学会第三四回大会(一九八三) における同氏の報告から学ぶところが多かった。(『朝鮮学報』一一〇、彙報五七〜八頁参照)

(5) 韓国精神文化研究院『韓国古小説目録』(一九八三) 四七頁。

(6) 前掲『静嘉堂文庫国書分類目録』付、「静嘉堂文庫略史」二二一頁。

(7) Maurice Courant, Bibliographie Coréenne (一八九四) 第一巻、四三三頁。なおそれにはフランス語による簡単な内容紹介が付されている。それによれば、「辛未録、辛未の年(一八一一) の物語一巻四ッ折、三二張、紅樹洞新板、辛酉年(一八六一) 二月刊ガベレンツによるL・O・V・コレクション。純祖朝の辛未の年、平安道の文官李禧著、と郭山地方の禹君則が、平安道の嘉山地方の多福洞で反乱を準備する。彼らはその地方を攻撃し、その地方官を殺す。彼らは博川の地方官を捕え、いたるところに略奪を広げる。とりかこんだ地方官たちは反乱者たちをうまくつかまえることができない。ソウルから送られた軍隊は反乱者たちをつかまえ、つかまった主謀者たちはやつざきにされた」内容の理解に多少の省略、誤解があるようであるが大筋においてはまちがいない。

(8) 越智唯七『新旧対照朝鮮全道府郡面里洞名称一覧』(中央市場、一九一七) 三八頁。

(9) 서울特別市史編纂委員会『서울通史』(上) (一九七二) 五六七頁。

(10) 金東旭「前掲論文」一一三頁。

(11) 『辛未西賊日記』(京都、河合文庫) 安州記、二三張、

嘉賊之出既在於十八日、自安州至京城、莫不繹騒。

(12) 金東旭編『前掲影印本』第一分冊四七九頁。

(13) 『同上書』第二分冊、五七七頁。

(14) 金東旭「前掲論文」二九頁～一三一頁。

(15) 金宇鐘『韓国現代小説史』（長璋吉訳註、龍渓書舎、一九七五）第三章芸術至上派と同人活動の項、参照。

(16) 本書は写本による漢文記録で、必ずしも時間の継起には従っていないが、各地の地方官の記録などが使われており、ユニークである。

(17) 『陣中日記』四月二九日（国史編纂委員会本）三六〇頁。『関西平乱録』十六、一四七二頁。亀城府使が兵営に報じた牒報文中にあり、信頼性が高い。

(18) 『辛未録』一張　表三行～五行

(19) 『同上書』一張　裏未行～二張表三行

(20) 姜斅錫の『東国戦乱史』は、ハングル懸吐付きの漢文で該当部分は、

一辺製造軍服、以虎皮為帽、紅氈緑之、
以青花布、為衣、形與清国軍彷仏、

と叙述されている。一目、漢文訳であることがうかがえるであろう。なお姜斅錫は、『典故大方』の著者でもあり、有職古実にも詳しかった人物のようである。

(21) 例えば、博川津頭の負貰君（지겟군かつぎ屋）金芑伊山、年五十は、十二月十七日に、本里の人金汝正から、銭一両をもらって、金店（金鉱）に行く約束をしている。『関西平乱録』十三、三月十二日、一一九二頁（なおページ数は韓国、国史編纂委員会の写真版による）。詳しくは、拙稿「平安道農民戦争における参加層」（『朝鮮史叢』2一九七九）参照。金店、銀店の語は資料によってしばしば混交して登場する。

(22) 『辛未録』二張表五行～八行。漢文資料類に関しては、前掲拙稿参照。

(23) 『同上書』二張表九行～十二行

(24) 農民軍の檄文には、「平西大元師、為急急馳檄事」の書き出しで始められ、「起兵救民、義旗所到、莫不玆徯蘇」などの語がみられる。詳しくは拙稿「平安道農民戦争における檄文」（『朝鮮史研究会論文集』二一、一九八四）参照。また、『陣中日記』の十二月三十日の条には、平安兵使の状啓文中に「而所謂賊魁、前立大旗幟、鳴金擊鼓、極其凶獰、幾至追戮、捨命疾馳。我騎莫及、而所棄旗鼓、尽為拾得。」（前掲本一六〇頁）とあるように、旗さしものをも準備した本格的な反乱であったことがうかがえる。

(25) 『辛未録』二張裏七行～八行

(26) 『同上書』三張裏四行～五行

(27) 『続朝野輯要』（ソウル大学校古書）「仁厚対曰、公等義人義兵、何敢抗拒乎」

(28) 『辛未録』三張表六行～四張表十二行鄭著の死に対しては『殉節録』（延世大学校古書）などが表され、王朝的立場から顕彰された。また雲娘（妓名蓮紅）に関する考証は、小

田省吾『辛未洪景来乱の研究』（一九三四）五〇～五四頁に詳しい。

(29) 『辛未録』五張裏一行～七張表五行。博川郡守任聖皐に関しては、『西征日記』割註に「任聖皐、頗有恵政、賊不欲殺」（国史編纂委員会本、十一頁。）とあり、『陣中日記』には、「博川郡守任聖皐、避乱匿在棲雲寺、聞其母被執、仍出為賊所拘、在囚中送密書于兵営、請急撃破賊」（同本一四一頁）などのエピソードが書かれてあり、これらのエピソードも『辛未録』にはとり入れられている。また『辛未西賊日記』には、ほぼほぼハングル小説と同様のエピソードがのべられている（河合文庫本三張）。

(30) 『辛未録』七張表十一行～同裏四行

(31) 『陣中日記』十二月二八日一五五頁。今二十四日六日夜、百余把炬火、擺列於博川地松林、距清川江不過十里許、多岐哨探、則賊徒果為乗夜屯聚、隠伏於松林村中、而其数之多寡、未得的知。

(32) 『辛未録』一〇張裏五行～一〇行

(33) 『陣中日記』十二月三十日、一六〇頁。

(34) 『西征日記』一月十日、一三頁。

(35) 『辛未録』二四張表八行～同裏八行

(36) 『陣中日記』二月二五日、二五五～六頁。

(37) 『辛未録』二四張裏九行

(38) 『陣中日記』二月二七日、二五六頁。

(39) 『辛未録』三一張裏十行～三二張裏四行。『陣中日記』四月一九日の条には、平壌の壮士軍官玉載赫が洪景来の首をとったとあり（三四一頁）、辛未録の叙述と一致する。また四月二三日の平安兵使の報には、生どりにされた男女二九八三名中、女八四二名、十歳以下の男子二二七名をのぞいた一九一七名を陣前に梟首（さらし首）したとある。（三四六頁）。

(40) 『辛未録』三二張、結句。

(41) 金東旭『春香伝研究』（延世大学校出版部、増補版、一九七六）所収、「한글小説坊刻本의成立에対하여」三九〇頁。

(42) 例えば、李能和が編んだ本事件に関する資料集である『洪景来動乱記』（東洋文庫写真版）には、李能和自身の手になると思われる「洪景来動乱記刊行縁起序」が付されており、そこでは「景来実朝鮮之洪秀全也、然而官撰史書多匿其事、吾人無得以知其動乱之真相矣」との評語があって、中国の太平天国の指導者洪秀全に比喩している。また文一平の「史上의奇人」『湖岩全集』朝鮮日報社版、（一九三九）には「民衆革命の先駆」との評価があり、王朝史的な逆賊観の消失と伴に、日帝下における「民衆の英雄」への人物評価の変化がみられる。そのような意味で、解放直後に出された小説『洪景来伝』（李明善一九四七、서울協同文庫）における洪景来の人物像なども興味のあるところである。

としている（目録番号七九四）。「豊」と「風」は朝鮮語音では同音であり、人名なので確定は不可能なのかも知れないが、後考をまちたい。

（補註）『장풍운전』の「풍」の字には韓国では普通「豊」の字をあてているようであるが、静嘉堂文庫蔵本には「張風雲傳」の書きこみがあり、またクーランの書誌も「張風雲傳」

（早稲田大学語学教育研究所非常勤講師・206東京都多摩市永山三―三―一四―五〇三）